

福島分科会

開催日 平成24年11月10^日~11^日

会 場 コラッセふくしま

テーマ

若者達が活躍する『持続可能なまち・地域・社会』

趣 旨

被災地区が復興するためには、善意によるボランティア的支援に依拠するだけではなく、次世代を担う子どもや若者層を含めて、住民自身が主体的・自律的に地域づくりに参画することで、持続可能な力強い地域を作り上げていく必要があります。

本分科会では、震災ボランティア活動等を通じて見えてきた地域独特の課題や回復可能性、地域再生のために必要なまちづくり・ひとづくりの方向性について、次世代を担う学生や若手社会人を中心として、市民やシニア層も交えて、同じ目線で議論します。



プログラム構成

11月10日(土)				11月11日(日)	
時間	内 容			時間	内 容
10:30 ～ 12:00	ポスターセッション			10:00 ～ 10:30	熟議の趣旨説明
13:00 ～ 13:30	オープニング・セレモニー ・主催者挨拶 ・箏曲演奏(遠藤 千晶) ・「詩の寺小屋」事業参加生徒による詩の朗読			10:30 ～ 12:00	熟議
13:30 ～ 14:30	基調講演 「震災後の東北福島で活躍する若者たちを見つめて」 講演者：大和田 ^{あらた} 新 (ラジオ福島アナウンサー)			13:30 ～ 14:00	・テーマ：みんなで震災経験を語り合おう！ そして今自分にできることは何かを見つけ出そう！
15:00 ～ 17:00	小会議① 学生・若手社会人の全国的なネットワーク構築を目指して	小会議② 学生とNPO・企業等との連携	小会議③ 震災経験から立ち上がる子どもたち	14:00 ～ 14:45	熟議結果の報告
				15:00 ～ 15:30	クロージング

第1日目 11月10日(土)

■基調講演 —13:30~14:30

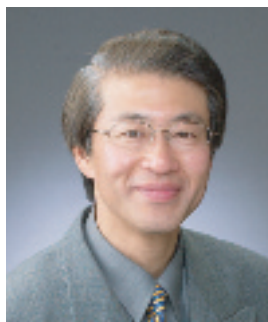
「震災後の東北福島で活躍する若者たちを見つめて」

株式会社ラジオ福島

大和田 新 氏

アナウンサー

昭和52年4月ラジオ福島入社。深夜番組「夜をぶっとばせリクエストで45分」や「かっとなびワイド」のパーソナリティーを務める。イベント司会、講演会、執筆など多くの分野で活動。特に、障がい者交流や朗読指導、骨髄バンク活動に力を注ぐ。東日本大震災発生以降は、県民・被災者に寄り添った放送を続け、「今、一番復興に必要なものは、教育と医療である」を信条に、現在も県内の被災地の取材に飛び回っている。



■小会議 —15:00~17:00

小会議① 学生・若手社会人の全国的なネットワーク構築を目指して

ふくしま復興支援学生ネットワーク

山口 小百合 氏

会長

震災以降、市内の避難所でボランティアとして活動。その後福島学院大学で災害ボランティアセンターを設立し、ふくしま復興支援学生ネットワークの設立にも携わり、メンバーとしても活動をする。福島県内にある大学、専門学校生と一緒に福島の復興を考え、活動を続けている。



特定非営利活動法人ユースビジョン

芝原 浩美 氏

事務局長

学生時代に、きょうと学生ボランティアセンター(現・ユースビジョン)の学生スタッフとして参画。卒業後はボランティアコーディネーターとして活動。その後、いくつかの中間支援NPOの職員を経て、現在、ユースビジョン理事・事務局長。全国の大学ボランティアセンターの運営サポートやネットワーク化に取り組むなど「若者」と「社会変革」をキーワードに基盤整備を行う。



日本文理大学

宇都 真太郎 氏

工学部 1年

大学入学後すぐに人間力育成センターでの先輩の取り組み、「絆プロジェクト」を知り、自らも被災地児童支援実践を受講。あゆみプロジェクトに参加、福島の児童を大分に招き、やりがいと解放感を感じさせるようなワークキャンプを企画・立案・運営する。その取り組みの中ではリーダー的存在。この経験を活かして、遠隔地からの被災地支援を更に展開していきたいと考えている。



小会議② 学生とNPO・企業等との連携

福島大学災害ボランティアセンター

土谷 一貴氏

岩手県出身。福島大学行政政策学類4年生。(学生団体)福島大学災害ボランティアセンターのセンターマネージメントチームとして団体の組織運営に携わっている。震災後は、福島市を中心に支援活動が続け、NPO法人市民公益活動パートナーズの職員として、「ひと・つながる」復興支援調査・交流促進プロジェクトのプロジェクトリーダーも担当。県内の復興支援の可視化を目的に、日々調査活動で県内を飛び回っている。



公益財団法人東日本大震災復興支援財団

荒井 優氏

専務理事

昨年3月22日に孫社長と共に福島入りしたことがきっかけとなり、復興支援のための公益財団設立を担う。現在は、月の半分を福島で過ごす。早稲田大学在学中の1995年に第5回YOSAKOIソーラン祭りの実行委員長を務め、全国行脚を行う。その時に会った多くの仲間が今回の復興に関わっていることに勇気をもらっている。



福島県中小企業家同友会
福島地区FMD委員会

立花 志明氏

山川印刷所 社長

印刷物を中心とした情報加工サービス業として、福島県内を中心として、「記憶に残るお手伝い」を合言葉に、「お客様のお役立ち隊」を目指す(株)山川印刷所を経営する一方で、福島県中小企業家同友会福島地区にて、福島の大学生と中小企業経営者とのコラボレーションで、何か新しい発見、提言、ビジネスチャンスを作り出せないか、積極的に模索するためにFMD委員会を企画、活動している。



小会議③ 震災経験から立ち上がる子どもたち

OECD東北スクール

OECD東北スクールは、福島大学・OECD・文部科学省が連携して行う、教育復興プロジェクトです。福島・宮城・岩手の被災地の中学生・高校生、約100人が、2014年8月にパリで東北の魅力をアピールするというプロジェクトゴールをめざして、国内外の著名人によるワークショップや地域活動で学び合います。このプロジェクトには学校や教育行政、企業、NPO、国内外の応援団も参加し、現在もなおネットワークが拡大し続けています。



福島大学人間発達文化学類 子ども支援ボランティア

滝澤 拓也 氏

人間発達文化学類 4年

震災直後から、避難所や仮設住宅、リフレッシュキャンプ、土曜子どもキャンパスなどで、避難している子どもたちと接してきました。この1年半の子どもたちの変化や、それを見守る大人たち、若者達に興味を持ちながらボランティアを続けています。どうすれば現状が打開できるのか、多くの人たちと意見を交換できればと思います。



福島大学人間発達文化学類 子ども支援ボランティア

根本 真理 氏

人間発達文化学類 3年

福島大学人間発達文化学類東日本大震災教育支援プロジェクト『子ども支援ボランティア』で現在活動中。仮設住宅に訪問し、遊び・学びの支援を行う他、大学に子どもたちを集めて企画する『土曜子どもキャンパス』の取り組みも行っています。



独立行政法人国立青少年教育振興機構

北見 靖直 氏

指導主幹

平成2年から15年間、東京都立青年の家4ヶ所に勤務。都青年の家廃止後も青年の家の職務継続を志し、都を退職。独立行政法人国立青年の家本部（現独立行政法人国立青少年教育振興機構）の公募採用試験を受験。平成17年4月から国立中央青少年交流の家に6年間の勤務を経て現職。青年の家専門職歴22年。中央では不登校、ニート、ひきこもりを対象にした自立支援事業「30日間のセルフチャレンジキャンプ」を担当した。また、昨年、福島の小学生3860名が参加した「リフレッシュ・キャンプ」の企画運営に携わる。



第2日目 11月11日（日）

熟議 —10:00～14:00

テーマ みんなで震災経験を語り合おう！

そして今自分にできることは何かを見つけ出そう！

熟議の進め方とねらい：

これまでの震災経験や復興関連活動等を振り返って、これからの東北のまちづくり・ひとづくり、『持続可能なまち・地域・社会』の可能性について考えます。

まず、自己紹介を行い、次に震災以降の各自の経験を語り合いながら、グループ内で問題意識を共有します。そして、今後のまちづくり・ひとづくりを進める上での課題について意見交換を行います。最後に、課題解決のために、たとえささやかであっても「今の私たちにできることは何か？」について考えてみましょう。

ポスターセッション

小会議で事例報告する団体や県内外の学生ボランティア団体を中心にポスターを展示します。参加者は各ブースに立ち寄って説明者と意見交換したり交流することができます。ポスターの展示は2日間行っています。

1 ふくしま復興支援学生ネットワーク

東日本大震災後単体で活動をしていた学生同士の繋がりがから同年7月に発足しました。情報とノウハウの共有を第一の目的とし県外の学生とボランティアのマッチングも行っています。県北支部、県中支部、いわき支部、会津支部に分けられ、避難者に寄り添った支援を目指しています。



2 福島大学災害ボランティアセンター

福島大学災害ボランティアセンターは、避難所運営をしていた学生を中心に、今後も日常の中から上がる被災地ニーズに柔軟にかつ適切に、そして学生らしく対応していこうと、2011年5月に立ち上がった団体です。現在250名の登録者を抱え、設立後、被災地支援から始まり、子どもの低線量地へのキャンプ、仮設住宅への生活支援活動、コミュニティづくりを目的とした季節のイベント等、生活に寄り添った活動を続けています。



テーマ 震災から一年半を過ぎた被災者生活支援とこれから

3 公益財団法人 東日本大震災復興支援財団

公益財団法人東日本大震災復興支援財団は、東北の子供たちが笑顔を取り戻し、夢と希望をはぐくむ環境づくりのお手伝いをしています。高校生向け奨学金「まなべる基金」(第1回奨学生1,209名)や、福島の小学生向け体験プログラム「ふみだす探検隊」(第1・2回136名参加)など、子どもたちがこれまでのように学び、遊び、夢を描けるよう、現地のNPOと協力しながら、さまざまな活動を行っています。※現在は「まなべる基金」へのご支援を募集しています。東北の新しい未来を創る子どもたちに、皆さまの温かいご支援をお願いします。



4 日本大学工学部 「地域連携活動研究会 R.I.S.M.」

日本大学工学部(福島県郡山市)のサークル、「地域連携活動研究会 R.I.S.M.」です。工学を専攻している僕たちが、地域に飛び出してできること、担うべき役割をみんなで模索しつつ、楽しく、気軽に、そして謙虚に活動することを目指します。専門知識を活用しつつも、総合的な知識とバランス力が必要とされる「トータルエンジニア」が求められて久しい今日、様々な経験と知識を身につけ、創造性豊かな思考が培われること、様々な人々の、多様な価値観に出会うことを目標に活動しています。



5 NPO 法人日本ボランティアコーディネーター協会(JVCA)

【ボランティアコーディネーター】の専門職としての確立をかねて活動するNPO(事務所:東京都新宿区)。福島県内に仮設住宅(みなし仮設を含む)に避難されているみなさんを支える生活支援相談員などの活動を応援するために、研修会の開催やコーディネーション力を高めるハンドブック作成などに取り組んでいます。被災した方々が一方的に支えられるのではなく、それぞれの役割をもって支え合えるコミュニティづくりを目指しています。
<http://www.jvca2001.org/> Email: jvca@jvca2001.org Tel: 03-5225-1545



テーマ 復興を支える コーディネーションのチカラ

6 フクシマ環境未来基地

フクシマ環境未来基地は、東日本大震災発生後の5月より、いわき市を拠点に活動を始めました。当初は災害ボランティアセンターでの活動に参加する形で活動していましたが、現在は、環境を切り口とした復興支援活動を行っています。具体的には、津波で被害を受けた海岸林の再生に向けた、「苗木 for いわき」プロジェクトや、被災した海岸の木を活用して、仮設住宅で交流しながらボランティアを作る活動などをトチギ環境未来基地と共に行っています。



テーマ 環境と福祉の連携

7 福島県立医科大学赤十字奉仕団

福島県立医科大学赤十字奉仕団は現在団員数が100名を超える医大1の大きさのボランティアサークルです。赤十字奉仕団には青葉学園グループ、献血グループ、作業所グループ、自閉症グループ、障害者スポーツグループ、小児科訪問グループ、東北関東学生募金ネットワークの7つのグループがあります。震災後には青葉学園グループや小児科訪問グループは避難所ボランティアを行いました。東北関東大震災学生募金ネットワークは東日本大震災後に発足したグループです。



テーマ 被災された方のために私たちが出来ることを

8 日本文理大学 人間力育成センター あゆみ PROJECT

学生たちの自主的な被災地支援活動から、更に可能性と効果を高める為に、正課授業の中で開講された「被災地児童支援実践授業」の中で立ち上がった学生組織。遠隔地からでも出来る被災地支援の在り方を模索し、地元大分県の資源を最大限に活用した、やりがいを持たせられるワークキャンプを今年8月に行う。現在も参加した南相馬市の小学生と連絡を取り合い、本プロジェクトは進化し続けている。



テーマ 遠隔地による被災地支援

9 OECD 東北スクール

OECD 東北スクールは、福島大学・OECD・文部科学省が連携して行う、教育復興プロジェクトです。福島・宮城・岩手の被災地の中学生・高校生、約100人が、2014年8月にバリエで東北の魅力をアピールするというプロジェクトゴールをめざして、国内外の著名人によるワークショップや地域活動で学び合います。このプロジェクトには学校や教育行政、企業、NPO、国内外の応援団も参加し、現在もなおネットワークが拡大し続けています。



テーマ 震災をバネに新しい教育を

10 福島大学人間発達文化学類 子ども支援ボランティア

子ども支援ボランティアは、大震災の翌月、人間発達文化学類の教員からの呼びかけに応えた学生達によって開始したプロジェクトです。避難所での学習指導や遊びを中心とした第1期、仮設住宅での子ども支援活動と行事を行った第2期、大学での「土曜子どもキャンパス」を加えた第3期と、一年半以上続けてきました。地元大学でしかできない、子どもたちとの人間関係づくりをベースにしたボランティア活動です。



テーマ 被災した子どもたちとの関係づくり

11 日本福祉大学 災害ボランティアセンター

2011年3月11日に発生した東日本大震災を受け、被災地に対する支援の実行組織として、学生・教職員が結集する「災害ボランティアセンター（以下、災害VC）」が3月31日に発足しました。災害VCでは、東北の被災地に実際にボランティアを派遣するために、プログラムを考えたり、説明会をしたり、また、派遣をするだけでなく愛知県からできる支援も考えています。そして、近い将来に起こると言われている東海・東南海地震に対しての防災や減災についても、大学生の私たちがだからこそできることはないかと考えています。



テーマ 学生と学生の連携

12 桜の聖母短期大学

「福島学」の授業の一環として南相馬市を訪れた際に、はじめて本当の被災の現状を知りました。それから聖母短大生が自分たちにできることを考え、南相馬の方と笑顔を共有できるような移動文化祭を企画することになりました。青年会議所の方々にサポートしていただきながら、事業計画や会計、広報などを学生自身が進めていきました。当日は活動を通してふれあい、南相馬と聖母短大の新たなコミュニティを築くことができました。



テーマ 桜の聖母短期大学移動文化祭事業「今日ゆうSmile ～桜でつなぐ笑顔のわ～」

13 NPO 法人 市民公益活動パートナーズ

福島市を中心とした南東北エリアを対象とする中間支援NPO。発災後、地域コミュニティや避難者の生活再建支援活動等に取組む。長期化する復興支援活動を継続的に行うためには情報の集積と共有、支援団体同士の連携が重要と考え、思いを同じくする福島大学の学生とのコラボによる調査・交流事業に取組んでいます。



14 一般社団法人 Bridge for Fukushima

案内図

